



明治維新150年特集

東久世通禧の長崎密行

東久世通禧は五卿の一人で、文久3(1863)年8月18日の政変以降、長州を経て太宰府に慶応元(1865)年から同3年まで滞在し、多くの文化人や幕末志士達と親交を深めました。明治維新後は政府要職を歴任しており、明治23(1890)年に初代貴族院副議長、同25年には第3代枢密院副議長に就任します。

五卿は太宰府転座当初、九州諸藩の警衛の下、不自由な生活を送っていたようです。しかし、

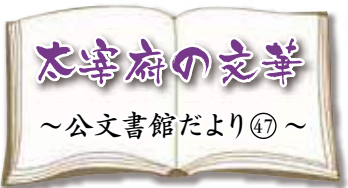
慶応2年、第二次長州出兵が不調に終わると幕府の権威は失墜し、滞在後期には各地を遊行するなど五卿は比較的自由な日々を過ごしていました。

東久世は帰洛がいよいよ現実味を帯びてきたころ、長崎行きを計画します。当時の長崎は、列強諸国との条約により

外国人居留地が整備されており、各国商館が建設され、多数の貿易品と最先端技術が集まる場所でした。

東久世の長崎旅行は慶応3年11月24日から12月10日の2週間余の日程で行われました。東久世は薩摩藩士の協力を得て「薩摩藩士東十郎」と名乗り、身分を隠して長崎を目指します。

長崎では多数の人物と出会っています。その一人が薩摩藩士の五代友厚で



す。五代は明治初期に実業家、政商として活躍しましたが、幕末には列強諸国を歴訪し、薩摩藩の貿易・近代技術導入に重要な役割を果たしていました。東久世は五代と「封建論」について議論をしたり、一緒に英国の軍艦や製鉄所を見物したりしています。かの商人グラバーとも会いました。「カラハア別宅」(グラバー邸のことと推測されます)で談話し、別の日には彼が経営する製茶工場を訪問しました。

東久世はそのほかにもオランダ領事館・写真店・蒸気精米場などを見学し、洋酒や西洋料理も堪能しています。米国人宣教師フルベッキやオランダ領事ボードウィンとも面会を果たし、また商館で小銃を購入しています。太宰府帰着後の12日、早速この小銃を内山村に設置された射撃稽古場で試し撃ちしました。

12月14日には帰洛が決定し、五卿は19日に太宰府を出発して27日に京都の明治天皇に謁見します。文久3年に都を追われてから雌伏の数年に耐えた東久世の長崎行きは、約2週間と短期間でしたが、西洋技術を精力的に見学し維新の立役者との交流を深める有意義な旅行となりました。

太宰府市公文書館 篠崎 将貴